教育史学会第 61 回大会　参加のご案内

会員　各位

第 61 回大会は岡山大学で開催いたします。

主な会場は教育学研究科講義棟です。別掲の案内図をご参照ください。

ご参加を心よりお待ちしております。

1. 大会参加費・懇親会費

	一般会員・臨時会員	学生会員	臨時学生会員
大会参加費	3,000 円	無　料	1,000 円
懇親会費	4,000 円	2,000 円	2,000 円

一般会員以外が参加する際には、臨時会員とし、一般会員と同額とします。

学生会員の大会参加費は、無料とします。学部・大学院に在籍する会員は、受付で学生証をご提示ください。会員でない学生が参加する際には、臨時学生会員とし、特別料金とします。

懇親会費は、学生会員、臨時学生会員ともに特別料金とします。

2. 受付

受付は、講義棟 1 階ホールで行います。

大会受付で大会参加費をお支払いください。『発表要綱集録』と名札などをお渡しします。名札にご所属とお名前をご記入ください。

懇親会費も大会受付で申し受けます。

学会費の納入は、学会事務局受付で申し受けます。

3. 研究発表・コロキウム

研究発表とコロキウムの会場は、講義棟の 2・3 階です。

研究発表予定者は、下記の点にご留意ください。

(1) 発表時間は 30 分（研究発表 25 分、質疑応答 5 分）です。発表申込の際に共同報告者が申告されている場合は、共同報告者の人数にかかわらず、60 分（研究発表 50 分、質疑応答 10 分）です。

(2) 発表内容は未発表の研究に限ります。

(3) 指定された分科会の開始時刻（9：00／13：00）までにご参集ください。遅刻した場合、本大会での発表資格を失います。当該分科会の発表順序は変更しません。発表予定者が欠席した場合も同様です。

研究発表、コロキウムにかかわる配付資料は、発表予定者、オルガナイザーのご判断により、ご用意ください。大会準備委員会では、印刷・増刷のご希望に応じられません。

なお、本プログラムの構成上、研究発表とコロキウムの題目について申込書と異なる体裁に変更した部分があります。どうかご了承ください。

4. 総会・研究奨励賞授与式

総会と研究奨励賞授与式の会場は、講義棟 2 階の 5202 室です。

10 月 7 日（土）の 13 時から開催いたします。会員の方はご出席をお願いいたします。

5. シンポジウム

シンポジウムの会場は、講義棟 2 階の 5202 室です。

テーマは「近代学問における歴史研究の意義―政治史、経済史、科学史、そして教育史―」です。10 月 7 日（土）の 14 時 10 分から開催いたします。

6. 懇親会

懇親会の会場は、ピーチ・レストラン（4 階生協食堂）です。

10 月 7 日（土）の 18 時から開催いたします。瀬戸内の料理や岡大ブランドのお酒も準備したいと思います。ぜひご参加ください。

懇親会終了後、会場近くのバス停（岡大西門）から JR 岡山駅行きのバスを利用できます。定時バスが 20 時 5 分に出発しますが、20 時 25 分発の臨時バスも増便しています。

7. 昼食について

10 月 7 日（土）、8 日（日）、両日とも学内生協食堂のピーチ・カフェテリア（西門近く）とマスカット・カフェテリア（附属図書館近く）を利用できます。7 日（土）は J テラス・カフェも利用できます。コンビニエンス・ストアはピーチ・カフェテリアが入る棟内に 1 店、大学周辺にも 2～3 店あります。適宜ご対応ください。

8. 宿泊

大会準備委員会による斡旋は行いません。

9. 託児サービス

本大会では実施いたしません。

10. 書籍販売

プログラムの刊行に際し、ご協賛をいただいた出版社等による書籍の販売がございます。積極的なご利用をお願いいたします。

11. 第 61 回大会準備委員会

委員長： 尾上　雅信

委　員： 髙瀬　淳、 梶井　一暁、 小林　万里子、 平田　仁胤

大会準備委員会ウェブサイト https://edu.okayama-u.ac.jp/~kyouikushi61

12. 問い合わせ先

教育史学会　第 61 回大会準備委員会

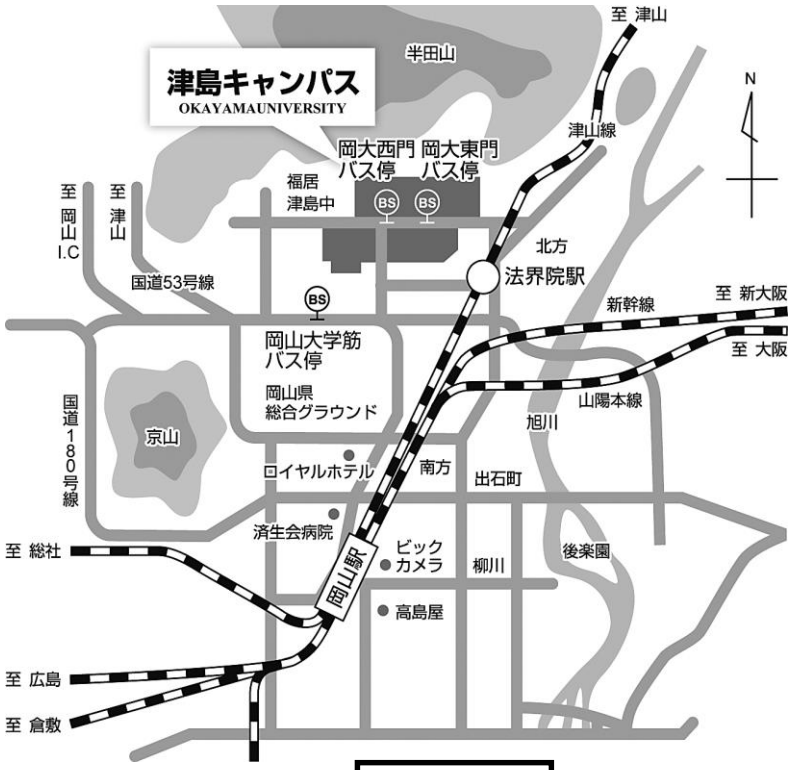
〒700-8530 岡山市北区津島中 3-1-1

岡山大学　大学院教育学研究科　梶井一暁研究室気付

TEL & FAX　086-251-7708　　E-mail　kyouikushi61@okayama-u.ac.jp

会場へのアクセス

交　通　案　内　図



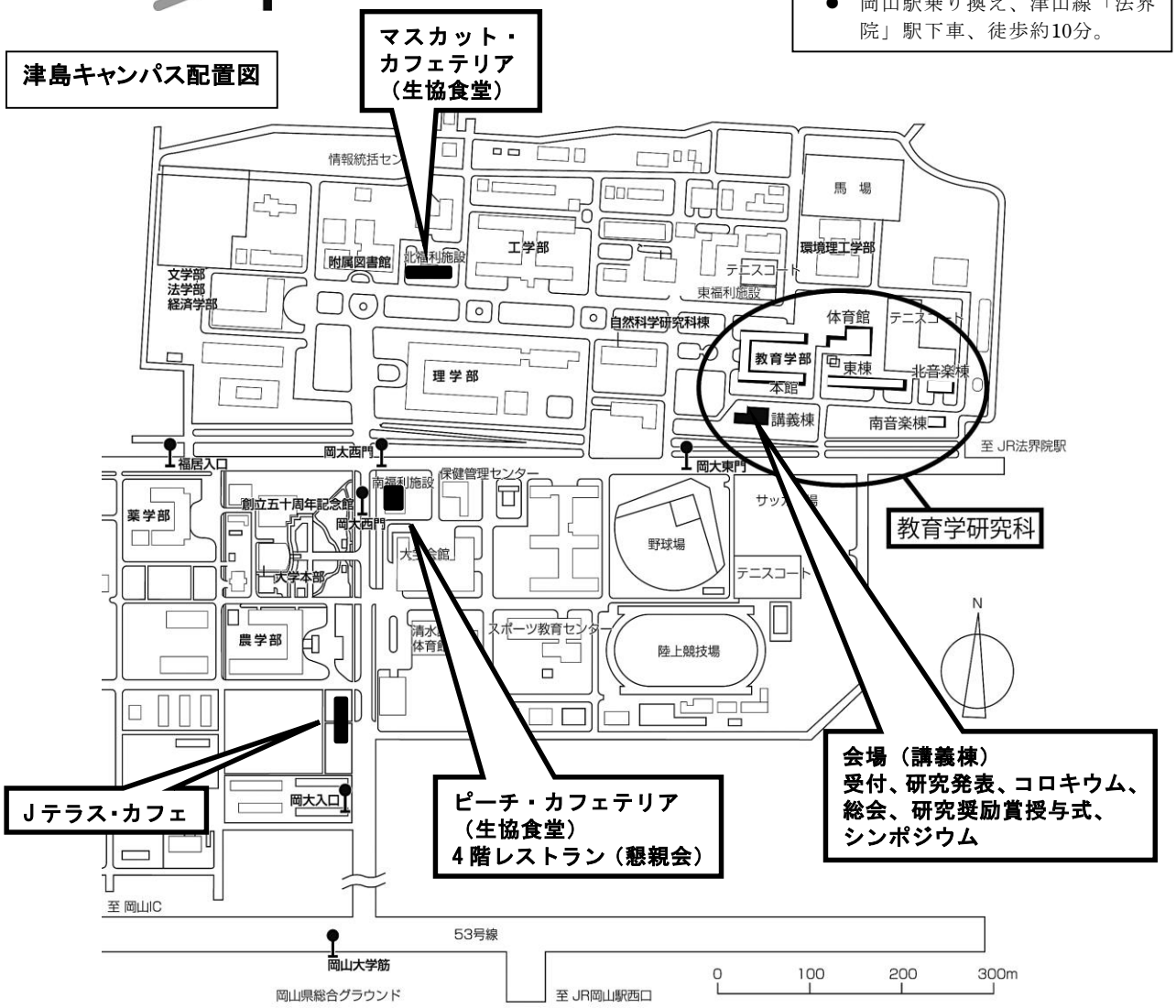
○バス（岡山駅から）

- 岡山駅運動公園口（西口）バスターミナル22番乗り場から岡電バス【47】系統「（岡山大学経由）岡山理科大学」行きに乗車、「岡大西門」下車（約10分）、徒歩5分。
  ※通常使うことが多いバスです。
- 岡山駅後楽園口（東口）バスターミナル13番乗り場から岡電バス【17】【67】系統「妙善寺」行きに乗車、「岡大東門」下車（約30分）、徒歩2分。
  ※この路線は市内を廻るため時間がかかります。
- 岡山駅後楽園口（東口）バスターミナル7番乗り場から岡電バス【16】系統「津高台団地・半田山ハイツ」行き、【26】系統「岡山医療センター国立病院」行き、【36】系統「辛香口」行き、【86】系統「運転免許センター」行きのいずれかに乗車、「岡山大学筋」で下車（約10分）、徒歩15分。

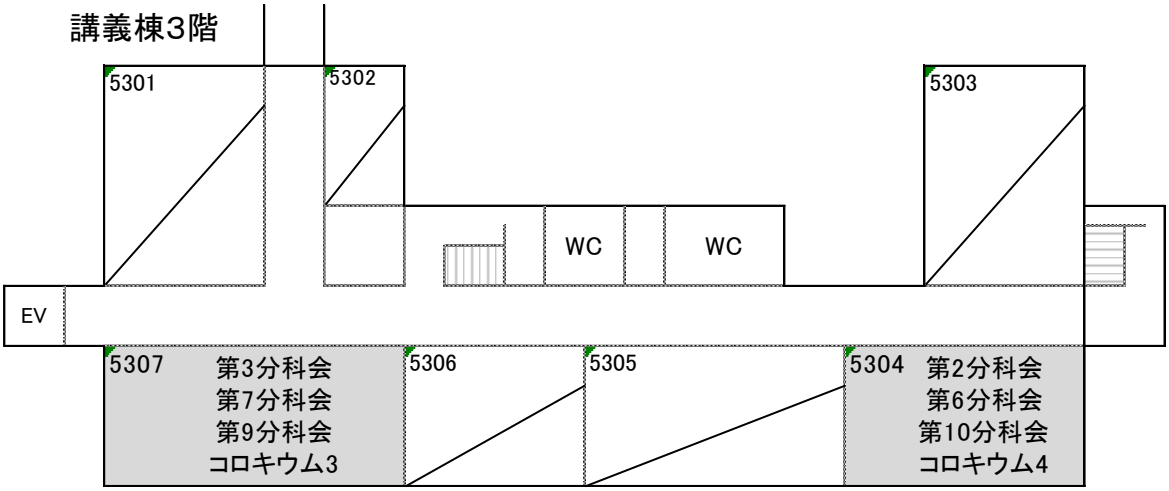
○JR（岡山駅から）

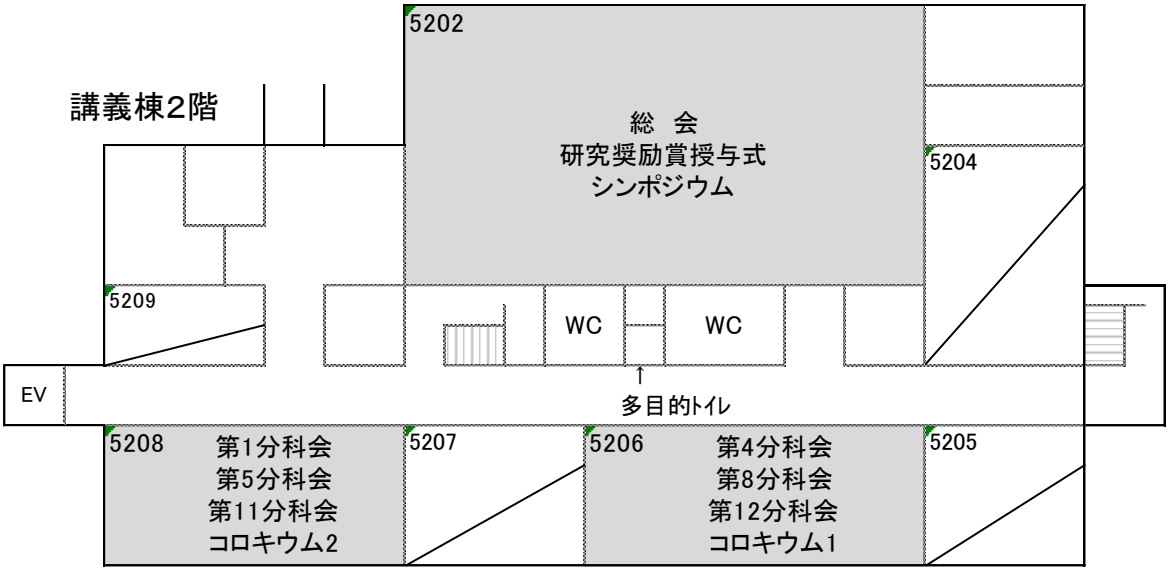
- 岡山駅乗り換え、津山線「法界院」駅下車、徒歩約10分。

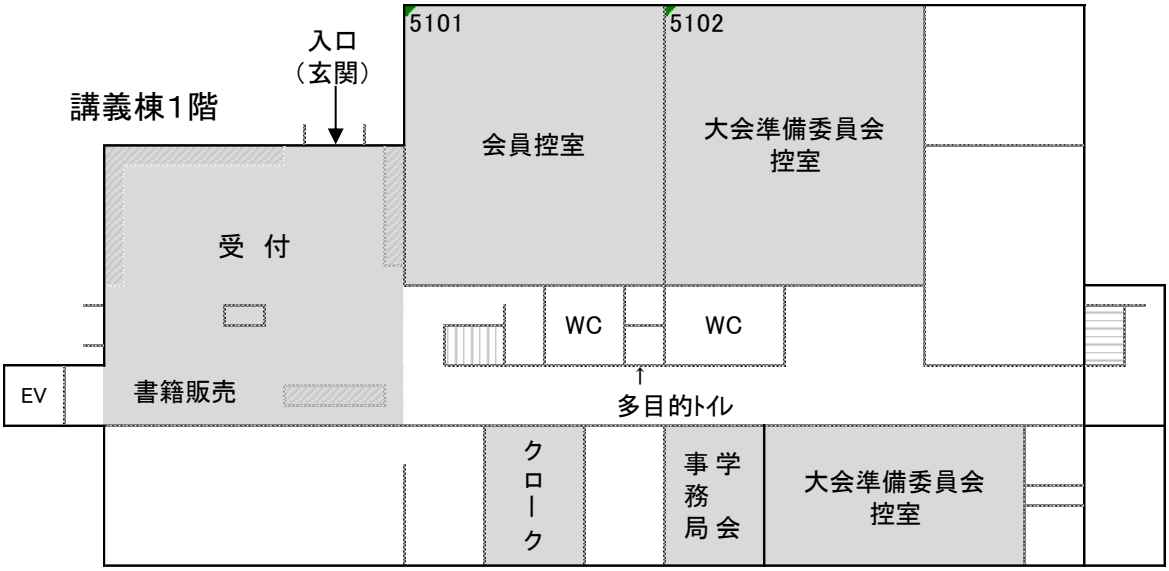
津島キャンパス配置図



会　場　案　内　図


講義棟3階
5301
5302
5303
WC
WC
EV
5307
第3分科会
第7分科会
第9分科会
コロキウム3
5306
5305
5304
第2分科会
第6分科会
第10分科会
コロキウム4


講義棟2階
5202
総　会
研究奨励賞授与式
シンポジウム
5204
5209
WC
WC
EV
多目的トイレ
5208
第1分科会
第5分科会
第11分科会
コロキウム2
5207
5206
第4分科会
第8分科会
第12分科会
コロキウム1
5205


入口
（玄関）
講義棟1階
5101
5102
会員控室
大会準備委員会
控室
受　付
WC
WC
EV
書籍販売
多目的トイレ
クローク
学務局
事務局
大会準備委員会
控室

タ イ ム テ ー ブ ル

	10月7日（土）	10月8日（日）	
8：15	**受　付** 講義棟 1階ホール	**受　付** 講義棟 1階ホール	8：15
9：00	**研 究 発 表** 講義棟 2階　5206、5208 3階　5304、5307	**研 究 発 表** 講義棟 2階　5206、5208 3階　5304、5307	9：00
11：30			11：30
	休　憩	休　憩	
13：00	**総会・研究奨励賞授与式** 講義棟2階 5202室	**研 究 発 表** 講義棟 2階　5206、5208 3階　5304、5307	13：00
14：00			
	休　憩		
14：10	**シ ン ポ ジ ウ ム** 講義棟2階 5202室		
			15：30
		休　憩	
		コ ロ キ ウ ム 講義棟 2階　5206、5208 3階　5304、5307	15：40
17：40			
	（大会第1日　終了）	（大会第2日　終了）	
18：00	**懇　親　会** ピーチ・レストラン （4階生協食堂）		18：00
20：00			

10月6日（金）、理事会、機関誌編集委員会、書評委員会が開催されます。

大会　第１日

10月７日（土）

研　　究　　発　　表

10月7日（土）　研究発表

第1分科会　講義棟2階　5208室

司会　皿田　琢司（岡山理科大学）　鈴木　理恵（広島大学）

〔1〕 9：00　官僚任用制度の確立と文部省視学官
松谷　昇蔵（早稲田大学・院）

〔2〕 9：30　特例からみた明治初期教育制度
湯川　文彦（お茶の水女子大学）

〔3〕10：00　明治前期における教員の「雑務」
―表簿の作成を中心に―
宮坂　朋幸（大阪商業大学）

〔4〕10：30　五日市憲法草案作成者・千葉卓三郎（1852～83）の政治観
―教育観を探る一環としての考察―
岡本　洋之（兵庫大学）

〈総合討論〉　11：00～11：30

第2分科会　講義棟3階　5304室

司会　梅野　正信（上越教育大学）　木村　元（一橋大学）

〔5〕 9：00　占領期におけるアメリカの道徳教育への期待
高橋　潤子（九州情報大学・非）

〔6〕 9：30　治療の場としての里親家庭
―1940年代末～60年代初頭「里親委託に適さない子ども」に対する眼差しと対応―
田中　友佳子（九州大学）

〔7〕10：00　1950年代の公立小学校における「混血児」教育
上田　誠二（横浜国立大学・非）

〔8〕10：30　福岡県における地方改善事業・融和事業のながれについて
―遠賀郡芦屋町の地方改善事業中の育英奨励費を中心に―
竹永　茂美（福岡県人権研究所）

〈総合討論〉　11：00～11：30

第３分科会　講義棟３階　5307 室

司会　　大谷　奨（筑波大学）　三上　敦史（北海道教育大学）

〔9〕 9：00　紗那学校の歴史
―開拓使が択捉島に設置したアイヌ学校の歴史―
小川　正人（北海道博物館アイヌ民族文化研究センター）

〔10〕 9：30　開拓使・三県統治期北海道における公立学校への地所下付
井上　高聡（北海道大学）

〔11〕10：00　1930 年代後半から 1940 年代前半における北海道の初等教育
―「国民学校令」実施前後の小学校の実態―
坂本　紀子（北海道教育大学）

〈総合討論〉　10：30～11：00

第４分科会　講義棟２階　5206 室

司会　　飯田　史也（福岡教育大学）　荻路　貫司（福島大学・名）

〔12〕 9：00　シャルル・ロランのリベラリスム
―18 世紀フランス教育史の一断面―
越水　雄二（同志社大学）

〔13〕 9：30　初等公教育教員の「公務員」性成立をめぐる歴史の日仏比較
―フランスを中心にして―
河田　敦子（東京家政学院大学）

〔14〕10：00　フランス第三共和政期における女子教育
―女子リセ・コレージュと修道院寄宿学校―
山内　由賀（神戸女子大学）

〈総合討論〉　10：30～11：00

大会　第１日

10月7日（土）

シ ン ポ ジ ウ ム

シ ン ポ ジ ウ ム

講義棟 2 階　5202 室　14：10～17：40

近代学問における歴史研究の意義
―政治史、経済史、科学史、そして教育史―

〔 報 告 者 〕　小田川　大典（岡山大学）
山本　千映（大阪大学）
金　凡性（広島工業大学）
〔指定討論者〕　柏木　敦（大阪市立大学）
〔 司 会 者 〕　渡邊　隆信（神戸大学）
尾上　雅信（岡山大学）

《趣旨》

教育はいまそこで、動いている。政治も経済も科学も、いまそこで動き、私たちの目の前にある。教育学も政治学も経済学も科学も、動き、変わる現場をもつ学問である。そして私たちは、その変動する現場を対象とする諸学問のなかでも、歴史研究という世界に住している。

教育学においてなぜ歴史研究は必要か。本シンポジウムでは、この問題関心を教育史研究者による教育史研究者のための議論のうちにとどめず、諸学問における歴史研究者との対話へと開き、教育史研究の意義を再考するための手がかりを得る機会としたい。

教育史研究の意義について、かつて上原専禄が「何故に教育史の研究が行われるのであろうか、ということを一般化しますと、歴史研究は何のためになされるのかという問題になるようですが、その歴史研究は何のためになされるかという問題の一部分として、教育史研究は何のために行われるのかという問題があるのか、それともそのような関連ではなくて、歴史研究一般では何のために行われているかわからないけれども、教育史の方ではこのような意味において教育史の研究が行われなければならないと意識されているというのか。その辺が私には問題になってくるのであります」と語り、つぎのように指摘していた。

> というのは、なるほど経済史の研究がある、政治史、文学史の研究があり教育史の研究がある。こういう工合に並べてみると、それは歴史研究一般の部分研究のように見えるけれども、果たして教育史研究というものは、経済史研究や政治史研究が、歴史研究一般の中での部分研究、あるいは領域研究を意味しているというのと同じような意味で教育史研究というものが行われるのだと、こういえるのかどうか。むしろ教育史研究の意味は、経済史研究だとか、あるいは政治史研究の意味とは違うというように意識しなければならない面があるのではないか。

1957 年、本学会第 1 回大会での「特別発表」（歴史の研究法について）においてである（『日

本の教育史学』第１集、1958 年、pp. 263-264、復刻版)。

それから時はめぐり、60 年、本大会は第 61 回大会となる。上原による教育史研究への期待ないし問題提起は、私たちにおいてどのように覚え直されるか。私たちはそれにどれだけ応え得ているか。

この問いに応えようと本シンポジウムでは、とくに諸学問における歴史研究との交差を通じ、その再考の手がかりを得たいと考えている。

教育学はいわゆる近代社会における必要の学として発達してきた学問のひとつである。同じく政治学、経済学、科学も、近代社会に必要な学として発展してきた学問である。ここではとくに近代学問の性格を帯びる領域として、政治学、経済学、科学、そして教育学を取り上げ、それぞれの学問において、歴史研究がどのような意義をもつことが期待されているか、三学問領域の研究者から報告いただき、それに対して教育史研究の立場からのコメントをいただくことを試みたい。

むろん、それぞれの学問はその成立背景をまったく同じにするものでない。単純に近代学問としてひとくくりできない側面ももつ。しかし、それぞれの学問は、純粋に原理の探究のうちに作業を閉じて役割を果たすだけでなく、冒頭で述べたような社会に存する現場に資することが、大なり小なり求められるところがある点で、同じ地点を有するといえる。社会的な有用性からみた評価とまったく無縁ではありえないところに、私たちは同じく立っているのだとも、換言できるだろう。そして、それぞれの学問のなかに位置を得て、私たちは歴史研究を進めてきている。

政治学における政治史、経済学における経済史、科学における科学史、そして教育学における教育史。これらの学問におけるそれぞれの歴史研究が、(1) その学問のなかでどのような位置にあり、どのようなアカデミックな意義を有するのか（学問的意義)、(2) また、その歴史研究はどのように社会に貢献し､社会的な有用性を保持するのか／しないのか(社会的意義)､(3) そして、私たちは大学等でそれを教える者であるのだが、その歴史研究は大学等で教えられる領域としてどのような性格をもつのか（教育的意義）などを主な論点として、意見を交わすことができればと望むものである。それぞれの歴史研究の意義や役割を突きあわせてみると、どのような共通点や相違点がみえてくるのか。歴史研究の交差的関係から拓かれる研究テーマの発展の可能性はないだろうか。議論はおそらくオープンエンドに終わることとなるが、異なる学問領域における歴史研究の意義やそれを専門領域とする者の立場などを知り、情報交換できる場としたい。

《報告者プロフィール》

小田川　大典（おだがわ　だいすけ）

岡山大学教授。修士（法学）。研究領域は政治思想史、政治哲学。

主な著書に富永茂樹編『啓蒙の運命』(名古屋大学出版会、2011 年、共著)、田中秀夫ほか編『共和主義の思想空間―シヴィック・ヒューマニズムの可能性―』(名古屋大学出版会、2006 年、共著)、鈴木貞美ほか編『日本文化の連続性と非連続性 1920 年-1970 年』(勉誠出版、2005 年、共著)、主な論文に「現代の共和主義―近代・自由・デモクラシー―」(『社会思想史研究』 32 号、2008 年)、「崇高と政治理論―バーク、リオタール、あるいはホワイト―」(『年報政治学』2006 年 2 号、2006 年）などがある。

山本　千映（やまもと　ちあき）

大阪大学教授。博士（経済学）。研究領域はイギリス経済史。

主な著書に『西洋経済史』(有斐閣、2010 年、共著)、主な論文に“Agricultural Surveys in Japan and England”, K. Kondo ed., *History in British History: Proceedings of the Seventh Anglo-Japanese Conference of Historians*, Tokyo, 2015 (with Manabu Ozeki)、「労働と世帯―産業革命期イングランドの経験に即して―」(社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』有斐閣、2012 年)、“Two Labour Markets in Nineteenth-century English Agriculture: the Trentham Home Farm, Staffordshire”, *Rural History*, 15(1), 2004 などがある。

金　凡性（きむ　ぼむそん）

広島工業大学准教授。博士（学術）。研究領域は近現代の日本社会における知識と技術。

主な著書に『明治・大正の日本の地震学―「ローカル・サイエンス」を超えて―』(東京大学出版会、2007 年)、主な論文に「紫外線をめぐる知識・技術・言説」(『現代思想』第 35 巻第 12 号、2007 年)、“Seismicity Within and Beyond the Empire: Japanese Seismological Investigation in Taiwan and Its Global Deployment, 1895-1909”, *East Asian Science, Technology and Society: An International Journal*, Vol. 1, No. 2, 2007、「戦間期日本における紫外線装置の開発と利用」(『科学史研究』第 51 巻第 261 号、2012 年）などがある。

《指定討論者プロフィール》

柏木　敦（かしわぎ　あつし）

大阪市立大学教授。博士（教育学）。研究領域は日本近代初等教育制度政策史。

主な著書に『日本近代就学慣行成立史研究』(学文社、2012 年)、主な論文に「小学校における二重学年制の導入と実施状況―大正期富山市における秋季学年制―」(『日本教育史学会紀要』第 7 巻、2017 年)、「戦前期小学校教科書における字体および活字の変遷―活字と手書きとの統一をめぐって―」(『教育史フォーラム』第 12 号、2017 年）などがある。

大会　第 2 日

10 月 8 日（日）

研　　究　　発　　表

10月8日（日）　研究発表

第5分科会　講義棟2階　5208室

司会　高木　雅史（中央大学）　山田　恵吾（埼玉大学）

〔15〕 9：00　西山庸平の生活教育思想と地域教育実践に関する一考察
―明治末期高知県夜須尋常高等小学校における活動―
三羽　光彦（芦屋大学）

〔16〕 9：30　自由学園における新教育運動とその展開
―藝術教育の位置づけに注目して―
福原　充（立教大学）

〔17〕10：00　大正期における小学校教師と地域社会
―長島重三郎の意識形成に焦点を当てて―
真辺　駿（東京学芸大学・院）

〔18〕10：30　大正期漁村女性の主体形成
―米騒動の教育史的研究―
本村　遼平（東京学芸大学・院）

〈総合討論〉　11：00～11：30

第6分科会　講義棟3階　5304室

司会　大島　宏（東海大学）　渡邊　言美（就実大学）

〔19〕 9：00　1950年代前半の岩国米軍基地と生活綴方
―恩田操による学校文集『デルタ』の編纂とその反響に着目して―
山口　刀也（京都大学・院）

〔20〕 9：30　1950年代における地域教育実践に関する一考察
―新潟県旧佐渡郡羽茂村の場合―
知本　康悟

〔21〕10：00　1950～60年代における漁村の長期欠席と夜間中学
江口　怜（東北大学）

〔22〕10：30　県校長会における教育会の位置づけ
―秋田県を事例として―
板橋　孝幸（奈良教育大学）

〈総合討論〉　11：00～11：30

第 7 分科会　講義棟 3 階　5307 室

司会　駒込　武（京都大学）　山﨑　直也（帝京大学）

〔23〕 9：00　壬戌学制の六・三・三制の実施をめぐる中華教育改進社における議論
今井　航（別府大学）

〔24〕 9：30　植民地期台湾における天皇崇敬教育
樋浦　郷子（国立歴史民俗博物館）

〔25〕10：00　1920～1930 年代植民地朝鮮の師範学校の「教育学」教科書分析
蓮池　重代（東国大学校・院）

〔26〕10：30　香港の愛国心教育の歴史
山田　美香（名古屋市立大学）

〈総合討論〉　11：00～11：30

第 8 分科会　講義棟 2 階　5206 室

司会　香川　せつ子（西九州大学）　宮本　健市郎（関西学院大学）

〔27〕 9：00　1860-70 年代アメリカの研究大学における学士課程の編成
―ジョンズ・ホプキンス大学及びコーネル大学におけるグループ・システムの導入とその背景―
原　圭寛（弘前学院大学）

〔28〕 9：30　20 世紀初頭の米国におけるクリティック・ティーチャーの果たした役割
―カリキュラム開発とその実践化過程に焦点をあてて―
藤本　和久（慶應義塾大学）

〔29〕10：00　20 世紀初頭イギリス市民大学における学士課程教育の構築と理念
中村　勝美（広島女学院大学）

〈総合討論〉　10：30～11：00

10月8日（日）　研究発表

第9分科会　講義棟3階　5307室

司会　烏田　直哉（東海学園大学）　平田　諭治（筑波大学）

〔30〕13：00　明治前期の歌括体通史教科書の展開
—概要と特色—
向野　正弘（向野堅一記念館／埼玉県立所沢西高等学校）

〔31〕13：30　「文検英語科」試験問題の研究
—岡倉由三郎による出題とその教育史的意義—
惟任　泰裕（神戸大学・院）

〔32〕14：00　久保田万太郎作「大寺学校」の教育史的意義
藤田　薫（東京医療福祉専門学校・非）

〔33〕14：30　石森延男が戦後初期の国語教育改革に果たした役割の再検討
—北海道立文学館所蔵資料を手がかりにして—
宇賀神　一（神戸大学・院／日本学術振興会特別研究員）

〈総合討論〉　15：00～15：30

第10分科会　講義棟3階　5304室

司会　小野　雅章（日本大学）　小宮山　道夫（広島大学）

〔34〕13：00　生きられた教養と旧制高等学校
—阪谷芳直日記より—
渡辺　かよ子（愛知淑徳大学）

〔35〕13：30　総力戦体制下の海軍飛行予科練習生
—制度的位置づけとその変化に注目して—
白岩　伸也（筑波大学・院）

〔36〕14：00　昭和戦前期における国民訓育連盟と「訓育優良学校」
—水戸市城東小学校に着目して—
国谷　直己（東洋大学・院）

〔37〕14：30　我が国における第二次世界大戦前の行事教育に関する研究
—1930 年代から 1940 年代前半の『福岡県教育』掲載記事検討による意義と限界—
余公　裕次（福岡県春日市立春日原小学校）

〈総合討論〉　15：00～15：30

第 11 分科会　講義棟 2 階　5208 室

司会　　大戸　安弘（放送大学）　　八鍬　友広（東北大学）

〔38〕13：00　明治初期府県教育会議の研究
—会議日誌・成議案の検討を中心に—
湯川　嘉津美（上智大学）

〔39〕13：30　広島大学教育学部ならびにその前身高等教育機関における教育学研究スタッフに着目した教育学研究の歴史的発展過程の一側面に関するプロソポグラフィ的研究
鈴木　篤（大分大学）

〔40〕14：00　「教師の倫理綱領」の再検討
—作成過程を中心として—
広田　照幸（日本大学）
冨士原　雅弘（日本大学）
香川　七海（日本大学）

〈総合討論〉　15：00～15：30

第 12 分科会　講義棟 2 階　5206 室

司会　　小玉　亮子（お茶の水女子大学）　　小峰　総一郎（中京大学）

〔41〕13：00　キール教育アカデミーにおける学外実習に関する研究
藤井　利紀（名古屋大学・院）

〔42〕13：30　ナチ期ユダヤ人障害者の救援とオットー・ヴァイト
岡　典子（筑波大学）

〔43〕14：00　ナチス・ドイツ下の図書館における子どもの読書の意義
—『図書館』誌の分析を中心に—
松井　健人（東京大学・院）

〈総合討論〉　14：30～15：00

大会　第２日

10月８日（日）

コ　ロ　キ　ウ　ム

10 月 8 日（日）　コロキウム 1

講義棟 2 階　5206 室　15：40～18：00

1950 年代教育史研究の意義と課題

オルガナイザー　米田　俊彦（お茶の水女子大学）
報　　告　　者　米田　俊彦（お茶の水女子大学）
鳥居　和代（金沢大学）

《趣旨》

2015 年に財団法人野間教育研究所日本教育史研究部門に 1950 年代教育史研究部会が設置され、大島宏・須田将司・鳥居和代・西山伸会員とともに研究報告とその検討を重ねてきた。1950 年代という括り方が時期区分の仕方として必ずしも自明ではなく、戦後改革期の後のこの時期については教育史研究としての蓄積が乏しく、教育行政学、教育社会学、教育方法学等の教育学の各分野の研究が先行している。しかし、歴史研究の対象とするに十分な時間が経過しており、実証的な手法によって諸事象を時代の全体状況に位置づけるとともに、1950 年代という時期の教育の歴史的な性格を明らかにしていくことが必要である。研究部会としての作業はまだ始まったばかりではあるが、第 1 回の中間報告として成果の一端を発表し、参加者からのご意見をいただきたいと考えている。

10 月８日（日）　コロキウム２

講義棟２階　5208 室　15：40～18：00

日本の教育史研究の国際化を探る
―*The History of Education in Japan(1600-2000)* 出版を素材にして―

オルガナイザー　辻本　雅史（中部大学）
山﨑　洋子（福山平成大学／武庫川女子大学）
森川　輝紀（埼玉大学・名）
木村　元（一橋大学）
米田　俊彦（お茶の水女子大学）
報　告　者　添田　晴雄（大阪市立大学）
N. Vansteenpaal（京都大学）
P. Cunningham（Cambridge 大学）

《趣旨》

教育史学会では、海外特別会員委嘱、国際交流委員会設置、国際教育史学会（International Standing Conference for the History of Education）への加盟など、近年、日本の教育史研究の国際化や海外発信に力を入れている。このたび私どもは、英文著作 *The History of Education in Japan(1600-2000)*（Routledge 社、2017.03）を６名（辻本、森川、山﨑、木村、米田、高橋哲）の共著で出版した。これまで日本教育史通史に関する学術的な英文の著作出版がみられず、海外の研究者からその必要性が指摘されていた。それに応えるべく本書出版を企画した。

本コロキウムでは、本書を素材にした２名のパネラーの報告、さらに本書の全原稿を英文読者及び教育史研究者の立場から校閲した Cunningham 氏（イギリス）によるコメントを受けて、日本の教育史研究の国際的発信のあり方について議論してみたい。（通訳あり）

10 月 8 日（日）　コロキウム 3

講義棟 3 階　5307 室　15：40～18：00

1940 年代後半　道府県各地「教育会」解散の諸相
―教育情報回路としての教育会の総合的研究　第 13 回―

オルガナイザー　梶山　雅史（岐阜女子大学）
報　　告　　者　須田　将司（東洋大学）
坂本　紀子（北海道教育大学）
梶山　雅史（岐阜女子大学）

《趣旨》

明治 10 年代に全国各地に登場した教育会は、明治・大正・昭和の各時代を通して、教員養成、教員研修そして中央・地方教育行政にも深く関わり、学校教育・社会教育の担い手として大きな役割をはたした。近代日本の教育界に巨大な教育情報回路を形成した教育組織が 1948（昭和 23）年 8 月、全国組織としての「日本教育会」が解散するとともに、各地方教育会も大半が解散の道をたどる。しかしながら約 70 年間の歴史を重ねてきたゆえに、各地での解散のプロセスは一様ではない。1940 年代後半の地方教育会解散の諸相について、事例に則して検討を進めたい。戦後新教育に向けてどのように歩み始めたか。教員組合、占領軍の軍政部指導、校長会、郡市町村の諸団体の動きなど考察すべき課題について、論議が深まることを願っている。

10 月 8 日（日）　コロキウム 4

講義棟 3 階　5304 室　15：40～18：00

就学の政策転換
―「勧奨」から「督責」へ―

オルガナイザー　荒井　明夫（大東文化大学）
報　　告　　者　大矢　一人（藤女子大学）
宮坂　朋幸（大阪商業大学）
大間　敏行（近畿大学九州短期大学）
軽部　勝一郎（甲南女子大学）
松嶋　哲哉（日本大学）

《趣旨》

本コロキウムの目的は、1870 年代から 1880 年代において中央政府および各府県において展開された就学政策の転換を、多様な角度から考察することを目的としている。

1872 年学制後の急速な近代学校の普及、そして 1900 年の第三次小学校令による義務期制度の法制化によって、初等教育機関への就学率がほぼ 100%に至るまで、我が国の近代公教育は驚異的に普及していく。従来の教育史研究ではそうした驚異的な普及の基盤は必ずしも明らかにされていない。

先行研究は、1870 年代を「就学勧奨の時代」、1880 年代を「就学督責の時代」と位置付けてきた。そして報告者らが関わってきた先行研究として就学告諭の研究がある。（荒井明夫編『近代日本黎明期における「就学告諭」の研究』2008 年、東信堂。荒井明夫・川村肇編『就学告諭と近代教育の形成』2016 年、東京大学出版会。）これらの研究を経て「勧奨」の時代にも既に「督責」政策の萌芽形態がみられることが明らかになっている。

そこで、今度は視点を変え「督責」に軸をおいて就学政策の展開を考察しようと試みた。具体的には、1880 年第二次教育令第 11 条の但し書き「就学督責ノ規則ハ府知事県令之ヲ起草シテ文部卿ノ認可ヲ経」とあるところの、各府県が作成した就学督責規則に焦点を当てることからはじめた。文部省は、同令を受けて翌 1881 年「達・第三号・就学督責規則起草心得」を制定した。各府県はこれに倣って「県就学督責規則」を制定していく。

報告者らは、オルガナイザーを研究代表者として「就学督責研究会」を発足させた。研究は小学校令期にまで及ぶ内容であるが、先ずは、各府県の「就学督責規則」を軸に、悉皆調査・分類・分析を試みた。

本コロキウムにおける報告は科学研究費補助金を受けた共同研究の成果の中間報告である。

＜報告内容と報告者＞（いずれも仮題目である）

「『各府県就学督責規則』の概観」　大矢 一人（藤女子大学）　宮坂 朋幸（大阪商業大学）
「『就学督責規則』の地域的展開」　大間 敏行（近畿大学九州短期大学）
「『就学督責規則』の問題別研究（1）巡回授業を中心に」　軽部 勝一郎（甲南女子大学）
「『就学督責規則』の問題別研究（2）処分をめぐって」　松嶋 哲哉（日本大学）